

# 海軍築城航空基地 稲童掩体

(稲童 1 号掩体壕)

行橋市文化財調査報告書 第 69 集

2023

行橋市教育委員会



整備された海軍築城航空基地 稲童掩体（2012年撮影）

## 序

本書は、海軍築城航空基地稲童掩体（稲童1号掩体壕）の発掘調査報告書です。掩体とは空襲から航空機を守るためにつくられた防護施設です。

本市の南東部、現在、航空自衛隊築城基地のある地域には、かつて海軍の航空基地がありました。この基地は昭和14年に飛行場の建設が始まり、太平洋戦争中にはここから特攻機も出撃しました。

飛行場の周辺には、関連施設が次々につくられましたが、掩体もその一つです。戦時中、数多くつくられた掩体も、戦後徐々に失われ、今では数えるほどになりました。失われつつある戦争の記憶を後世に伝えるため、平成14年に、このうちの一つを「稲童1号掩体壕」と名付け、市の史跡に指定して保存をはかることといたしました。

発掘調査は市の史跡となった掩体の保存や整備に向けて情報を得るために実施したものです。この発掘調査で得られた知見にもとづき、稲童1号掩体壕史跡公園を整備し、歴史学習や平和学習に活用してきたところです。このたびこの掩体が福岡県の史跡に指定されることとなり、これを機になお一層保存と活用に力を注いでまいりたいと考えています。

本書が戦争遺跡に関する学術研究はもとより、地域の歴史への理解と認識を深めるための資料として、広く活用されることを願っています。

終わりに、発掘調査や史跡公園整備に御協力いただきました多くのみなさま、九州防衛局、福岡県教育委員会をはじめとする関係諸機関に心より感謝申し上げます。

令和5年3月31日

行橋市教育委員会  
教育長 長尾 明美

## 例 言

1. 本書は行橋市教育委員会が、平成15年度に実施した福岡県行橋市大字稲童1095-17ほかに所在する海軍築城航空基地稲童掩体の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は「稲童1号掩体壕」という名称で行橋市の史跡に指定されていたが、令和5年3月に「海軍築城航空基地稲童掩体」の名称で福岡県により史跡指定された。このため本書では、『海軍築城航空基地稲童掩体』の名称を用い、省略する場合は「稲童掩体」「掩体」と記述することとした。また他の掩体と区別する必要がある場合は「1号掩体」と記述した。
3. 稲童掩体の発掘調査は、同遺跡の保存整備の資料を得るために実施したものである。
4. 調査は行橋市教育委員会が主体となって行った。調査組織は第1章に記す。
5. 遺構の実測図作成は、中原博、田中すま子、中島裕子、今村美香、島木邦子、佐藤愛子、古木初子が行った。
6. 発掘調査の写真は中原が撮影し、現況写真は小川秀樹が撮影した。
7. 遺物の実測は山口裕平、奥野康代、三仙恵理子が行った。
8. 遺物写真は小川が撮影した。
9. 遺構、遺物図面の整理および浄書は奥野が行った。
10. 挿図の作成は奥野と松尾留衣が行った。
11. 本文のレイアウトは奥野が、写真図版のレイアウトは松尾が担当した。
12. 本書に使用した方位は座標北である。
13. 本書で報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。
14. 本書の執筆は第2章3、第4章、第5章を天野正太郎が担当し、それ以外を小川が担当した。
15. 本書の編集は小川が行った。

# 本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1.	調査の経緯	1
2.	調査の体制	1
第Ⅱ章	位置と環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	3
3.	築城航空基地関連施設	4
第Ⅲ章	調査の記録	8
1.	調査の概要	8
2.	遺構と遺物	8
(1)	掩体	8
(2)	煉瓦敷遺構	12
(3)	土提状遺構	15
(4)	爆弾穴跡	15
(5)	機銃掃射跡	15
(6)	出土遺物	15
第Ⅳ章	稲童地区地下通信司令部壕の測量調査	18
第Ⅴ章	稲童掩体（稲童1号掩体壕）の保存整備	20
第Ⅵ章	結 語	22

# 図版目次

巻頭図版	整備された海軍築城航空基地稲童掩体	図版 8	1. コンクリート敷に残る機銃掃射の被弾痕(西から) 2. 地表に残る機銃掃射の痕跡(北から) 3. 機銃弾の出土状況 4. 発掘調査完了状況
図版 1	終戦後の築城飛行場とその周辺		
図版 2	1. 掩体群および誘導路 2. 羽根木地区送信所 3. 道場寺地区水源池 4. 犀川補助飛行場 5. 着艦練習場	図版 9	1. 現在の稲童掩体(2022年撮影) 2. 掩体前面から後部を望む 3. 掩体後部 4. 掩体前部奥壁に見える工法の違い 5. 掩体前部側壁に見える工法の違い
図版 3	1. 羽根木地区送信所跡 2. 誘導路跡 3. 石割施設跡 4. 小型無蓋掩体(消滅) 5. 大型無蓋掩体 6. 被弾痕の残る煉瓦塼(移設前) 7. 被弾痕の残る安浦神社石造物	図版 10	1. 前部奥壁と天井の接続部 2. 前壁の内側 3. 前壁の鉄筋 4. 前部天井の鉄筋 5. 掩体内部側壁に残る被弾痕跡 6. 前部奥壁に残る被弾痕跡(○印) 7. 掩体前壁に残る被弾痕跡 8. 掩体前壁の型枠跡と被弾痕跡
図版 4	1. 調査開始前の稲童掩体(除草作業中) 2. 調査前の掩体内部(後部を望む) 3. 調査前の掩体内部(東側)		
図版 5	1. 後部の開口部から流入した土砂の除去 2. 掩体内部の調査状況 3. 掩体内部の遺構検出状況(東側) 4. 掩体内部の遺構検出状況(西側) 5. 葉莢の出土状況(掩体内部)	図版 11	1. 機銃弾(掩体内) 2. 機銃弾(掩体前面) 3. 機銃弾(出土位置不明) 4. 葉莢(掩体内) 5. 葉莢(爆弾穴) 6. 葉莢(爆弾穴) 7. 葉莢(出土位置不明) 8. 葉莢(出土位置不明) 9. 投下電鍵(出土位置不明) 10. 不明鉄製品(爆弾穴) 11. 砥石(出土位置不明) 12. 煉瓦片(煉瓦敷遺構) 13. 煉瓦片(煉瓦敷遺構)
図版 6	1. 発掘調査状況 2. 煉瓦敷の検出作業 3. 掩体前面の遺構検出状況(南から) 4. 掩体前面の遺構検出状況(北から) 5. 煉瓦敷の検出状況(北から)		
図版 7	1. 爆弾穴跡(南から) 2. 爆弾穴跡の埋土(東から) 3. 爆弾穴跡の遺物出土状況(葉莢) 4. 爆弾穴跡の遺物出土状況(不明鉄製品)	図版 12	1. 地下通信司令部壕跡(東側出入口) 2. 地下通信司令部壕跡(階段) 3. 地下通信司令部壕跡(内部) 4. 地下通信司令部壕跡(内部) 5. 掩体の平成22年豪雨被害状況(内部右側) 6. 史跡公園駐車場 7. 被弾痕の残る煉瓦塼(移設後) 8. 旧仲津小学校奉安殿(移設後)

# 挿図目次

第 1 図	西日本の海軍航空基地	4
第 2 図	周辺の戦争遺跡分布地図(1/70,000)	5
第 3 図	築城基地位置図(1/50,000)	6
第 4 図	各部名称と計測部位	8
第 5 図	中攻用掩体配筋図(部分)(1/300)	9
第 6 図	稲童掩体構造図(1/400)	10
第 7 図	稲童掩体全体図(1/400)	11
第 8 図	発掘調査全体図(1/200)	13
第 9 図	煉瓦敷遺構・機銃掃射跡(1/40)	14
第 10 図	爆弾穴跡(1/100)	14
第 11 図	機銃掃射跡(1/100)	14
第 12 図	出土遺物(1/2・1/3)	16
第 13 図	稲童地下通信司令部壕跡実測図(1/200・1/400)	19
第 14 図	稲童1号掩体壕史跡公園整備図(1/600)	21

# 第 I 章 はじめに

## 1. 調査の経緯

現在の福岡県行橋市大字松原から築上郡築上町西八田にかけて、海軍の築城飛行場が建設され、周辺地域に次々と関連施設がつくられ築城航空基地が整備されていった。海軍の飛行場跡地は現在航空自衛隊築城基地となっているが、周辺には広域にわたり海軍時代の基地関連施設が今も点在している。基地の軍用機を空襲から防護するために造られた掩体もその一つである。こうした戦争遺跡は地域の近代史を学び、語り継ぐ上で重要な遺跡であるが、時間の経過とともに次第に失われてきた。コンクリート製の屋根を持つ有蓋掩体は1990年頃から崩壊や取り壊しが相次ぎ、小型の有蓋掩体はすべて失われてしまい、中攻用掩体3基を残すのみとなってしまった。

こうした状況のなか、地域の住民から戦争遺跡保存の要望があり、市教育委員会は戦争遺跡を地域の歴史を物語る文化財として保存していくため、戦争遺跡の分布状況を調査するとともに、平成11年度から1号掩体や、稲童地区に残る地下通信司令部壕の測量調査を行った。さらに1号掩体については、平成12年度にコンクリートの状態調査を行うなど、文化財指定に向けての調査も進めていった。

平成14年12月2日、3基残っていた中攻用有蓋掩体のなかで、保存や公開の面から最もふさわしい1基を後世に伝えるため、周辺も含む4,467㎡を市の史跡に指定し、指定名称を「稲童1号掩体壕」とした。市の史跡指定に際しては、慣用的に使われている「掩体壕」という名称を用いた。しかし海軍での正式名称は「掩体」であり、無蓋のものも含め、この種の遺構を表現するには「掩体」の用語がふさわしい。当遺跡は令和5年3月にあらためて福岡県により「海軍築城航空基地稲童掩体」の名称で史跡指定された。こうしたことに鑑み、本報告においては県の指定名称を用い、必要に応じて「稲童掩体」や「1号掩体」と略称することとした。なお1号という番号は、この掩体を特定するために市が付けた番号であり、海軍がこの掩体に対し付けた番号ではないことを付記しておく。

平成15年度には、史跡の保存整備に向けて、現状や内容を確認するために1号掩体を対象とした発掘調査を実施した。その後行われた保存整備事業(第V章参照)はこの発掘調査に基づいて行ったものである。

発掘調査報告書の刊行は諸般の事情で遅れたが、令和3年度より刊行準備に入り、遺構図の整理や浄書、遺物の実測などを行い、令和4年度に刊行することとなった。

## 2. 調査の体制

平成15年度の発掘調査、および令和4年度の報告書作成にあたっての組織は次の通りである。

## 発掘調査（平成15年度）

### 行橋市教育委員会

教育長	徳永 文昭
教育部長	光畑 浩治
文化課長	奥 広俊
文化課 文化財保護係長	小川 秀樹
文化課 文化財保護係	伊藤 昌広
文化課 文化財保護係	中原 博（調査担当）
文化課 文化振興係長	宮崎 森義
文化課 文化振興係	上原 圭三（庶務担当）

### 発掘調査作業員（順不同）

小副川若子、加来啓子、古城潮美、島田国光、松尾公子、森門都美子、柳田タミエ、山田早苗、吉田幸子、森門光生、田中すま子、中島裕子、今村美香、平渡智生、島木邦子、佐藤愛子、本田久代、北本悦子、谷口貞子、工藤祥子、古木初子

### 整理作業員（順不同）

橋田孝子、佐々木豊子

## 報告書作成（令和4年度）

### 行橋市教育委員会

教育長	長尾 明美
教育部長	辛嶋 智恵子
文化課長	小川 秀樹（報告書担当）
文化課 文化財保護係長	山口 裕平
文化課 文化財保護係	天野 正太郎（報告書担当）
文化課 文化財保護係	笠置 拓也
文化課 文化振興係長	石井 匠
文化課 文化振興係	藤井 志乃
文化課 文化振興係	長尾 萌佳

### 整理作業員（順不同）

奥野康代、松尾留衣

本報告書作成に当たっては、以下の機関や方々からご指導、ご協力いただきました。記して感謝の意を表します。福岡県教育委員会、宇佐市教育委員会、三輪宗弘、中野等、森井啓次、大庭孝夫、城門義廣、宇野慎敏、弘中正芳（順不同）



## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1. 地理的環境

海軍築城航空基地稲童掩体は、福岡県行橋市大字稲童に所在する。行橋市は福岡県の北東部京都平野の中央に位置する。古代には京都平野の中央部は大きな入り江があったが、その後、周防灘に注ぐ長峽川、今川、祓川などの沖積作用によって陸地化が進み、近世以降の干拓がそれに加わり、現在の地理的環境が形成された。一方、築城飛行場や掩体群が建設された行橋市稲童から築上郡築上町西八田にかけての海岸線は古代から大きな変化はなく、北側の長井地区から稲童地区にかけては、標高 10 m 前後の長井・稲童海岸段丘と呼ばれる段丘が形成されている。この段丘の最下位の黒浜砂層相当層は河成層と考えられ、下部付近には最大径 10 cm 大の安山岩の円礫を含んでいる。この層の上に長井砂層が堆積し、その上位には約 8 万年前の阿蘇 4 火砕流堆積物 (Aso-4) が 1 m 前後堆積している。最上位は完新世と考えられる黒色土壌層である。稲童掩体周辺では、東西に流れる音無川が幾度か流路を変えており、そのたび東西に連なる段丘を削り、複雑な地形が形成された。この地形を巧みに利用して、戦時中には掩体群やそれと飛行場を結ぶ誘導路が建設された。

広域的にみると築城航空基地は、九州北部から瀬戸内海西部を押さえる場所に位置する。築城航空基地と関連施設の距離を記すと、築城基地を所管する呉鎮守府まで約 150 km、下関要塞が置かれた関門海峡まで 30 km、陸軍造兵廠の置かれた小倉まで 27 km、宇佐航空基地まで 30 km、大分航空基地まで 70 km、佐伯航空基地まで 115 km となる。基地の西側には日豊本線が走り、最寄りの駅に昭和 8 年 (1933) に開業した築城駅がある。近世以来、当地域の商業や交通の中心であった行橋町は、基地の北西 9 km 位置する。この行橋町を中心に航空基地の建設用地となった仲津村を含む周辺の 8 村が合併して昭和 29 年 (1954) に誕生したのが行橋市である。

### 2. 歴史的環境

築城航空基地周辺の近代以降の歴史を見ていく。航空基地が建設される豊前国仲津郡や築城郡は江戸時代には小倉藩領であった。慶応 2 年 (1866) に第二次長州戦争で小倉藩が長州藩に敗れ、城があった企救郡が長州藩預かりとなったため、藩庁は田川郡香春を経て明治 2 年 (1872) 12 月に仲津郡豊津に移された。明治 4 年 (1871) 7 月に豊津藩は豊津県になるが、11 月には小倉県が誕生し、行政の中心は城下町だった小倉へと戻った。小倉には明治 31 年 (1898) に陸軍第 12 師団が置かれ、その後小倉陸軍造兵廠が設置されるなど、終戦まで軍都としての道を歩んだ。海上交通の要衝である関門海峡は、明治 22 年 (1899) に要塞地帯法により、「下関要塞地帯」に指定され砲台などが整備された。小倉の西に位置する八幡には明治 34 年 (1901)、官営八幡製鉄所が開業し、この一帯は日本の軍事、産業の一大拠点となった。

航空機の発達には航空基地の建設を促し、昭和10年代には、九州にも次々と軍用飛行場の建設が進められた。海軍は日本の領域を4つの海軍区に分け、それぞれを鎮守府が所管したが、九州の東岸は概ね呉鎮守府の所管する第二海軍区に属し、築城航空基地も呉鎮守府によって建設された。海軍の航空基地は洋上訓練に適した海岸付近に建設されることが多く、九州の東岸にはほぼ一定の間隔で築城、宇佐、大分、佐伯、富高、宮崎の各航空基地が整備された。さらに南の大隅半島には大戦末期、沖縄や本土の防衛のため多数の航空基地がつくられた。

京都府仲津村大字松原（現行橋市）から、築上郡八津田村大字西八田（現築上町）で海軍の飛行場建設が着手されたのは昭和14年（1939）12月のことである。昭和17年（1942）10月に築城海軍航空隊が開隊されるが、築城飛行場がまだ完成していなかったため、航空隊の訓練は宮崎県富高で行われた。昭和18年（1943）に飛行場が完成し、航空隊も築城基地に移動し、訓練を開始した。築城海軍航空隊は当初、基礎訓練を終えた艦上戦闘機搭乗員を実戦部隊に配置するための練習航空隊であったが、戦局とともに実戦部隊にもなっていた。飛行場の北側の稲童地区などに掩体が築かれ始めたのは昭和19年（1944）8月頃とされる。戦局がさらに悪化すると、築城航空基地でも爆撃航空機による体当たり攻撃を任務とする神風特別攻撃隊が編成されるようになる。昭和20年（1945）3月18日、築城から陸上爆撃機銀河による神風特別攻撃隊が出撃している。

昭和19年6月から北部九州も米軍の空襲に晒されるようになる。築城航空基地への空襲は昭和20年3月18日が最初でその後、5月14日、7月24日、7月25日、7月28日、8月7日、8月8日の7回に及んだ。米軍の記録によると攻撃を行ったのは、空母艦載機と沖縄に駐在した第7航空軍である。

終戦後、築城飛行場には米軍が進駐し、その後昭和25年（1950）に滑走路の拡張と改修工事が行われ、米軍の基地として使用された。昭和30年（1955）に返還され、航空自衛隊築城基地となり現在に至っている。



第1図 西日本の海軍航空基地

### 3. 築城航空基地関連施設

「戦争遺跡」という用語には定まった定義はなく、戦争に関連して設置された施設や戦争被害の痕跡が残っているものをいい、終戦後に建立された記念碑類までさまざまなものを含む。ここでは『航空隊引渡目録』（以下『目録』とする）を参考に、築城海軍航空基地に関連して設置された施設を中心に述べ

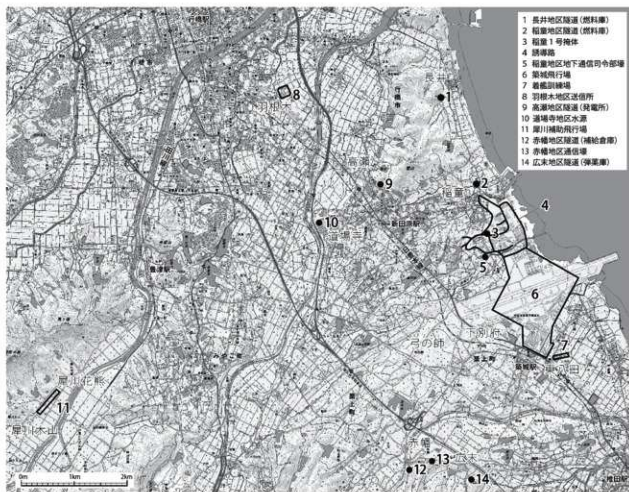
たい。ただし残存状況が未確認のものも含む。

『目録』を参照すると、築城基地に関連する施設が広く分散配置されていたことがわかる。羽根木（現行橋市北泉三丁目）の送信所のように広大な敷地に整備された施設もあるが、多くは丘陵など地形を利用して作られた地下壕や隧道、掩体で、戦況が悪化した段階で飛行場周辺の空襲に備えて急造されたことがうかがえる。

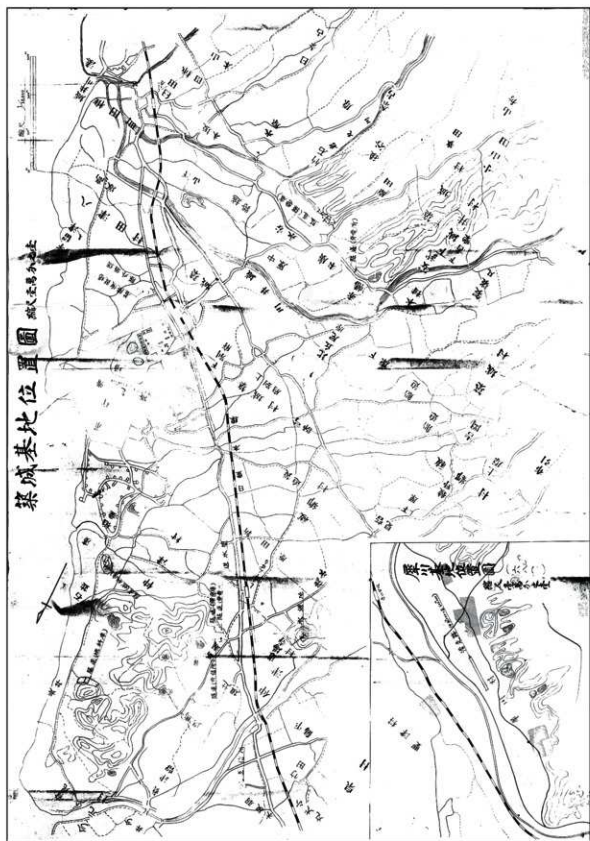
飛行場は京都府津村（現行橋市）と築城郡八津田村（現築上町）にまたがって建設された。

飛行場の北側に広がる行橋市域では、長井地区の丘陵の裾に燃料庫隧道が作られた。飛行場から北に約3km離れている。

稲童地区は飛行場から音無川を挟んで近接し、比高5m前後の段丘と谷が複雑に入り組む地形が広がる。この地形を活用し、段丘を掘り下げるなどして30基前後の有蓋・無蓋の掩体が築かれた。うち大型の有蓋掩体は4基であったと伝わるが、3基が現存する。『海軍航空基地現状表 内地の部』によれば、築城基地には有蓋掩体12基（大型4、小型8）、無蓋掩体40基（大型20、小型20）の計52基が築かれたとあり、稲童地区に大半が集中すると言える。飛行場と掩体をつなぐ誘導路は主に谷を利用し、一部段丘を切り通しているため、地形に痕跡をとどめている。飛行場に最も近い段丘上には地下通信司令部壕が設



第2図 周辺の戦争遺跡分布地図(1/70,000)



第3圖 築城基地位置圖 (1/50,000; 原圖は 1/10,000)

〔築城航空基地〕航空隊設置計画 7/14 (防衛省防衛研究所) 左巻反転

けられた。1号掩体の南西約100mに掩体や誘導路建設に用いる砕石を製造する石割施設があり、現在もコンクリート基礎が現存している。また掩体群地帯の北の小丘陵に長井地区と同様、燃料庫隧道が作られたが埋没している。稲童地区の掩体群は空襲の対象となったため、有蓋掩体だけでなく集落も被害を受けた。安浦神社の石造物や民家の塀、墓石などに銃弾痕が残るほか、安浦神社境内に爆弾穴が点在している。『目録』には稲童機銃砲台（二十五糎機銃）、稲童浜機銃砲台（同前）の記載がある。

内陸の羽根木地区に建設された送信所は、約200m四方のほぼ正方形の敷地を土塁で囲み、東西に門が設けられた。内部には2基の巨大な鉄塔と複数の建物があつた。西側に門跡の門柱などが残る。

高瀬地区では岨山（標高122m）南西麓の丘陵に電信所、発電所、弾薬庫などの隧道が掘られた。兵舎も設置され、炊事場の竈や井戸が残っている。

道場寺地区には水源が置かれた。西を流れる祓川から道場寺山（標高71.2m）山頂付近の4槽の貯水槽に水をくみ上げ、東南東に約3km離れた飛行場に送水した。貯水槽は道場寺山の西麓を通過する国道10号の工事の際一部崩壊した。『目録』にみられる新田原野高砲台（七輝野戦高射砲など）はこの地区にあつたと思われる。

現在の築上町域は飛行場から南に広がる。飛行場の南に隣接する東八田地区には着陸演習場が設けられた。現在も305m×67mの長方形土地区画が明瞭に残っている。『目録』には東八田のさらに南の高塚に高角砲台（十二糎高角砲など）、飛行場の西に接する弓の師地区に掩体、下別府地区に機銃砲台（二十五糎機銃）があつたことが記録されている。

飛行場の南方約3kmには英彦山（標高1199.5m）から長く続く丘陵先端部があり、斜面に隧道が掘削された。広末地区の隧道に弾薬庫、赤幡地区の隧道に通信壕・発電所と補給倉庫が置かれた。広末地区の隧道は複雑に張りめぐらされ、全長1,200mにおよぶ大規模なものである。

飛行場の西約8kmの地点に補助飛行場が建設された。現在みやこ町の犀川木山地区と犀川花熊地区にまたがる。600m×30mの滑走路、着艦練習塔、無蓋掩体数基があつた。滑走路跡の土地区画は圃場整備で消滅したが、着艦練習塔の基礎コンクリートが残る。また末江地区の山の尾根上に簡易的な哨戒塔があつたが、採土で消滅したと地元で伝わる。

## 【参考文献・参考資料】

「海軍航空基地現状表 内地の部」防衛研究所戦史史料・戦史叢書検索

「航空隊 引渡目録 7/14」JAOR（アジア歴史資料センター）Ref. C08011077000（防衛省防衛研究所）

日本海軍航空史編纂委員会 1969『日本海軍航空史』(2) 軍備編

航空自衛隊築城基地 1993『築城基地50年史』

行橋市史編纂委員会 2004『行橋市史』上巻

行橋市歴史資料館 2011平成23年度企画展『周防灘沿岸の掩体壕と戦争遺跡 写真展』

林 博史 2018『沖灘からの本土爆撃』

福岡県教育委員会 2020『福岡県の戦争遺跡』福岡県文化財調査報告書第274集

## 第三章 調査の記録

### 1. 調査の概要

海軍築城航空基地稲童掩体(旧稲童1号掩体壕)は、稲童地区に現存する中攻(中型攻撃機)用有蓋掩体3基のうちの1基である。

発掘調査は、史跡の保存整備に向け、現状と建造当初の状況の把握を目的として平成15年(2003)年5月21日から8月13日にかけて実施した。発掘調査は掩体の内部と掩体の前面、約900㎡を対象として行った。またこれとあわせて史跡指定地4,467㎡を対象に、平板による地形測量を行った。

調査の結果、掩体内部では、航空機の形状に合わせて地山を削って成形した様相が判明した。また戦後掩体内部で人が生活していたことで、建造当初の姿が若干損なわれていることもわかった。掩体の前面からは、2条の煉瓦敷造構や、米軍機による空襲の際に生じた爆弾穴や機銃掃射の痕跡が検出された。発掘調査では煉瓦や機銃弾や薬莖、戦時中のものと推定される機器の部品などが出土した。

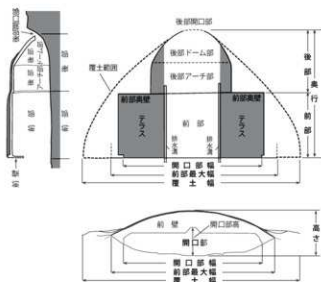
### 2. 遺構と遺物

#### (1) 掩体(第4図～8図 図版4・5・9・10)

##### 掩体の形態

1号掩体は海軍築城飛行場の約500m北に位置する鉄筋コンクリート製の中攻用有蓋掩体である。1号掩体を含む稲童地区の掩体の多くが、偽装と爆撃に対する防御の面から、飛行場の北側に広がる起伏に富んだ地形を利用してつくられた。

調査した掩体の規模は前部最大幅32m、同高さ8.5m、奥行き23.5m、開口部幅26.8m、同高さ5.5m(中央部)。掩体上面から側面にかけて覆土が施され、覆土も含めた掩体の規模は開口部付近で幅約42mである。築城航空基地に配備されていた一式陸上攻撃機や陸上爆撃機「銀河」などの双発の軍用機が格納できる規模である。日本海軍の掩体は、上から見ると凸字型を呈するものが多い。飛行機をバックで格納するため、長い主翼を収容する前部は大きな空間が必要だが、尾翼を収める後部は、小さな空間で済むためである。この掩体も大きな前部に小さな後部が付設される形態である。掩体後部の形状は、アーチ型かドーム型のいずれかが

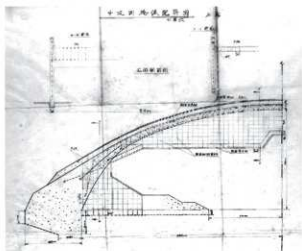


第4図 各部名称と計測部位

多いが、この掩体の後部はアーチとドームを複合した形状で前半部分がアーチ、後半部分がドームとなっている。

前面の開口部には格納した航空機を敵の攻撃から守るため、上部と左右に壁（以下「前壁」）が設けられている。前壁の中央は格納機の最上部が接触しないように、台形に切り込まれている。また掩体の最奥部には幅約8m、高さ約3mの半円形の開口部が設けられている。この開口部の外側は丘陵が掘り下げられ外部に通じている。後部開口部には、換気、明り取り、爆風抜きなどの用途が考えられる。

掩体内の床面は地山を整地したもので舗装などは確認されていない。掩体内の床は全面を平坦に整地するのではなく、格納機の機体の形状に合わせて地山を成形しテラス状の段を設け、側壁に接する部分は高く削り残し（あるいは盛り上げ）ている。これにより掩体側面の耐弾性能の向上を図ったものと考えられる。宇佐市教育委員会が所蔵する「呉海軍施設部管轄 海軍施設設計資料（一括）」の中に中攻用掩体配筋図（第5図）がある。この図にも地山成形なのかは不明ながら、稲童掩体と似たテラス状の段が描かれ、こうした形状が稲童掩体のみの特例でないことがわかる。テラス部分は掩体が戦後住居として用いられた際に部分的に掘削され、当初の形状が改変されていたが、整備の際に建造当時の状況に推定復元した。



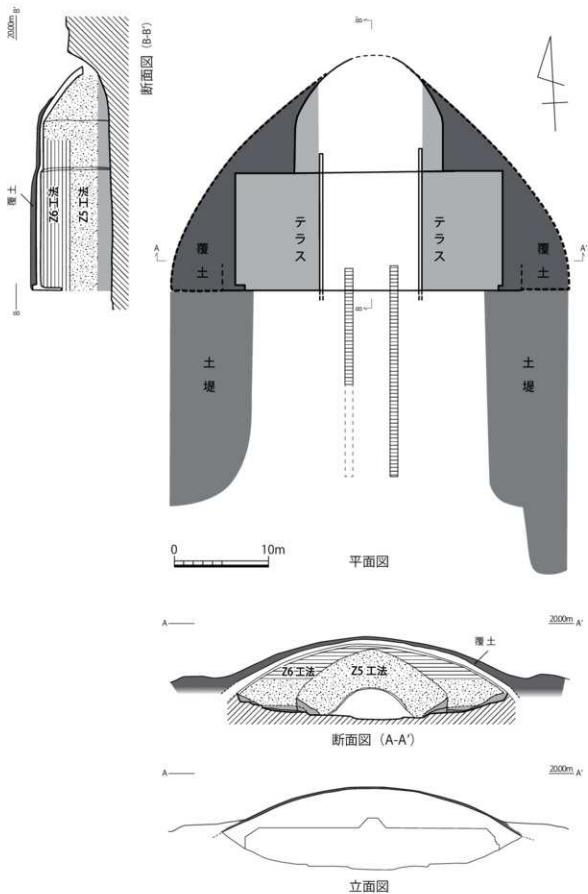
第5図 中攻用掩体配筋図（部分）(1/300)  
（宇佐市教育委員会 所蔵）

床面には、後部アーチ部付近から、掩体の外に向かい2条の溝が設けられていた。溝は素掘りで幅50cm、深さ30cm前後である。2条の溝の間の平坦面は幅約10mである。2条の溝は掩体内では直線的に掘られているが、掩体の外では蛇行する。掩体にもなう排水溝と思われるが、戦後住居として使用された際に手が増えられた可能性がある。

掩体には開口部にレールで移動できる防弾扉が付設されたものも存在するが、当掩体では防弾扉などを設置した痕跡は確認できなかった。

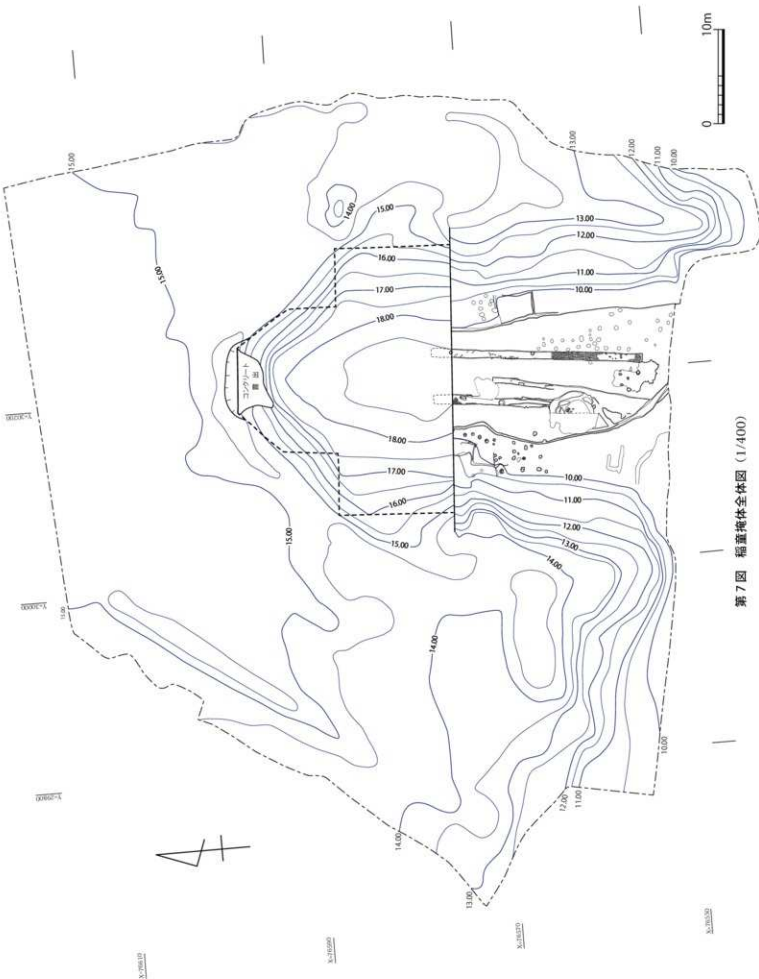
### 築造工法

海軍のコンクリート製有蓋掩体築造には、Z5工法やZ6工法など複数の工法が存在し、状況に応じ使い分けていたようである。Z5工法は饅頭形に土を盛り、これを型枠としてコンクリートを打設し、硬化後に土を掘り出す工法で「土饅頭工法」とも呼ばれた。Z6工法は鋼製型枠を組み、これに板材を取り付け、コンクリートを打設し、硬化後に型枠を取り除く工法である。1号掩体は内部の壁面に残されたコンクリート打設時の痕跡によってZ5工法とZ6工法を併用してつくられたことがわかる。壁面に土砂の痕跡が残る部分はZ5工法、板材の痕跡が残る部分はZ6工法が用いられたと推定される。前部の大型アーチから後部の小型アーチの半分までは床面から高さ約4mまでをZ5工法を用い、それより上はZ6工法を用いている。後部の小型アーチの後側とそれに続くドーム部分は、床面から天井まで全体をZ5工法を用いている。



第6図 稲童掩体構造図 (1/400)





第7図 稲置神社全体図 (1/400)

ただし当掩体におけるZ5工法は土を盛るのではなく、丘陵を掩体の形状に削り残して型枠としたのではないかと考えている。また、後部のドーム部だけでなく、アーチ部にも一部Z5工法用いているのが、丘陵（海岸段丘）を掘削して建造した当掩体の特徴であろう。

掩体の天井部や前壁に部分的に鉄筋が露出しており、鉄筋の使用が確認できる。第5図の配筋図を見ても中攻用掩体にかなり綿密な配筋がなされていることがわかる。掩体壁面のコンクリートの厚さは、上部の前壁が24cm前後、開口部左右の前壁が30cm前後、最奥部の開口部の壁厚が70cm～90cmである。天井部も含め、それ以外の部分の厚さは未計測である。

現在、掩体の上面は土で覆われている。上面の発掘調査は行っていないが建造当初から、偽装や防護のため土で被覆していたものと考えられる。現在は史跡保護のため伐採しているが、整備前には図版8-4のように掩体上面にも樹木が繁茂していた。

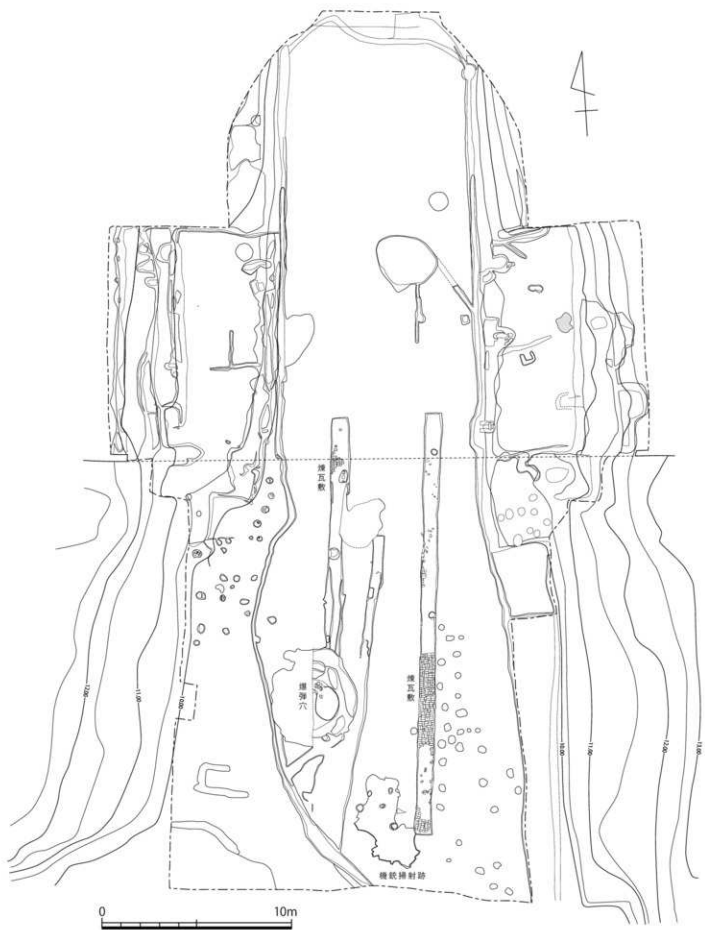
#### 掩体の被弾痕跡

築城航空基地は米軍機による空襲を度々受けた。米側の記録によるとその数は7回に及ぶ。この掩体にも空襲で被弾した痕跡が認められる。被弾痕跡は、掩体の前壁、内部の側壁、前部奥壁から後部まで広範囲にわたって認められる。その多くは航空機からの機銃掃射によるものと考えられるが、航空機からは射撃できない位置にも傷跡があり、これらは爆弾の破片などによって生じたものであろう。掩体の機能が失われるような致命的な打撃は受けていないが、被弾痕跡から内部に格納された航空機は、かなりの損害を受けたと推定される。この掩体の中で破壊された夜間戦闘機「月光」の目撃談が伝わる。

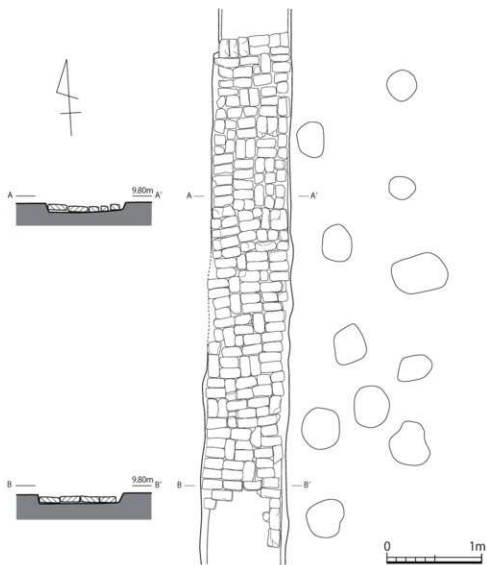
#### (2) 煉瓦敷遺構（第8・9図 図版6）

掩体前面では、掩体から平行して延びる2条の煉瓦敷遺構が検出された。残念ながら多くの煉瓦が抜き取られ、抜き取り痕のみを残す部分が多い。煉瓦敷は幅80cmで西側のものは爆弾穴やかく乱で右端が確認できないが、東側の煉瓦敷の長さが22.3mであることから、それと同等の長さであったと推定される。調査時に残っていた煉瓦には、赤褐色の硬質な煉瓦（11-12図・図版11-12）が少量認められたが、大部分は、黒灰色の質の悪いもの（12-13図・図版11-13）であった。おそらく赤褐色の煉瓦は戦後、再利用するために抜き取られ、質が悪く再利用できないものが現地に残されたのだろう。

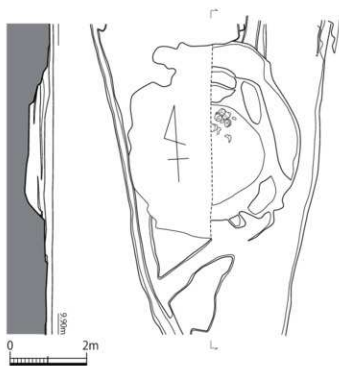
この煉瓦敷遺構は類例を知らず、用途については推察するほかないが、煉瓦敷が掩体の前面の限られた範囲に留まり、掩体内にも誘導路側にも延びていないことから、航空機をバックで掩体に格納する際ガイドの役割を果たしたのではないかと考えている。築城航空基地に所属する双発軍用機の主車輪の幅は、九六式陸上攻撃機が5.4m、一式陸上攻撃機が6.0m、陸上爆撃機「銀河」が5.09m、夜間戦闘機「月光」が4.0mである。検出された2条の煉瓦敷の間隔は心々で5.0mであることから、この煉瓦敷は「銀河」を想定してつくられたものだと考えられる。ただし、この掩体が「銀河」専用に使われていたわけではなく、状況に応じて各種の航空機が格納されたと考えられる。築城航空基地には「銀河」で構成された「攻撃第262飛行隊（K262）」が駐在した時期があるが、米軍への『航空隊引渡目録』（以下『目録』）によると終戦時には築城基地に「銀河」はなかったようである。



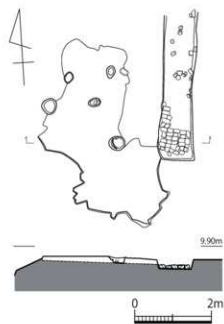
第 8 図 発掘調査全体図 (1/200)



第9圖 煉瓦敷道構・機銃掃射跡 (1/40)



第10圖 爆彈穴跡 (1/100)



第11圖 機銃掃射跡 (1/100)

### (3) 土堤状遺構 (第6・7図 図版9-1)

1号掩体の開口部の両側には、掩体の前方に向かって土堤状の張り出しが認められる。現在残っている土堤状の張り出しは東側が長さ約32m、西側が長さ23m。高さはどちらも3.5～4mである。この土堤状の張り出しは掩体を爆撃から防護するためのものであろう。丘陵を削って造作されたものだと考えられるが、一部盛土された部分もあるかもしれない。

### (4) 爆弾穴跡 (第10図 図版6・7)

掩体開口部の南側約10mから、米軍機が投下した爆弾によって生じた穴が検出された。完掘はしていないが、この爆弾穴は南北5.2m、東西4.5mの不整形で深さは0.6mである。爆弾穴内からは、栗莢(第12図-5・6、図版7・11)や不明鉄製品(第12図-10、図版7・11)が出土している。

米軍の記録によると、築城航空基地への空襲は、昭和20年3月18日、5月14日、7月24日、7月25日、7月28日、8月7日、8月8日の7回であるが、この爆弾穴がどの空襲で生じたものかは明らかではない。築城基地を空襲した米軍機としては、F6F-5、F4U-1D、SB2C-4E、TBM-3、P-47、A-26、B-24、B-25などがある。

投下された爆弾は20ポンド破片爆弾の集束弾が多く、周辺の波築築古墳群、波築築遺跡B区、稲童豊後塚遺跡ではこの爆弾の尾翼が複数出土している。しかし当掩体の調査では投下された爆弾に関する遺物が未確認であり、この爆弾穴が何によって生じたのかは不明である。なお爆弾穴は爆撃後に埋め戻されたようだが、その際破壊された煉瓦数は復旧されなかった。

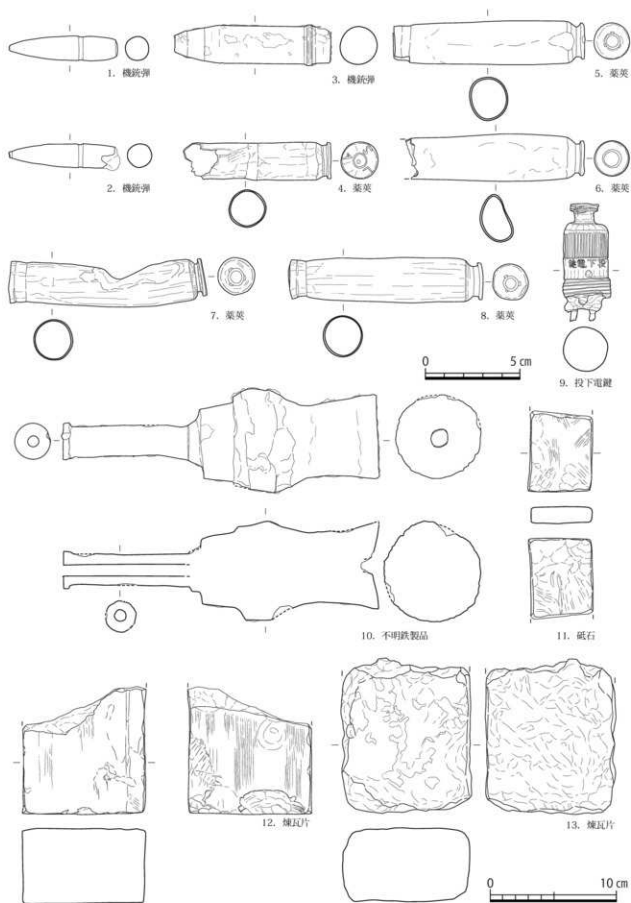
### (5) 機銃掃射跡 (第9・11図 図版8)

発掘調査で掩体前面で地表に貼られたコンクリートが検出され、そこに30～40cm前後の円形の破孔が認められた。この穴は米軍機の機銃掃射によって生じたものと考えられる。また周辺の地表面からも同じような大きさのピット状遺構が多数検出された。これらは表面検出に留まり、掘り下げて機銃弾などを検出していないことから断定はできないが、周辺の状況から機銃掃射の跡だと推察される。

### (6) 出土遺物 (第12図 図版11)

ここからは稲童掩体の発掘調査で出土した遺物について報告する。これらの中には時期や用途を特定できないものもあるが、概ね掩体が機能していた時期に帰属するものと推定される。なお出土位置を明記していないものは、調査区内で採取されたものの出土状況が不明な遺物である。

1と2は機銃弾で両者は同一規格である。法量や形状から米軍の12.7mm機銃弾と推定される。1は掩体内部より出土した。長さ58mm、最大径13mm、重さ42.1g。明瞭な施条痕(ライフルマーク)は視認できない。2は掩体前面より出土した。長さ57mm、最大径13mm、重さ40.89g。こちらも明瞭な施条痕は視認できないが、先端部がわずかに潰れている。3は20mm機銃弾である。長さ83mm、中心部計20mm、重さ105.19gである。口径20mmの銃器は、日本海軍では機関銃、日本陸軍や米軍では機関砲と呼称した。『目録』によると終戦時築城基地には日本海軍の九九式20mm機銃弾が大量に保管されており、本弾も九九



第 12 圖 出土遺物 (1 ~ 9 : 1/2 10 ~ 13 : 1/3)

式 20 mm 機銃弾だと考えられる。

4～7は機銃弾の薬莖である。4は掩体内部から出土。真鍮製と思われ、残長 7.8 cm、径 2.0 cm、重さ 44.33 g。底面に「SL4」の刻印があり、米国のセントルイス兵器工場で 1944 年に製造されたものだとわかる。頭部が欠損しているが、米軍の 12.7 mm 機銃弾の薬莖と推定される。5と6は爆弾穴から出土。5は先端が一部欠損するが完形に近く、長さ 10.1 cm、径 2.1 cm、重さ 62.3 g。6は先端が欠損し、胴部が変形している。残長 9.5 cm、復元径 2.1 cm、重さ 62.29 g。7、8は出土位置不明。7は中央付近が潰れている。長さ 10.2 cm、径 2.1 cm、重さ 77.35 g。8は尾部付近が潰れている。長さ 10.3 cm、径 2.1 cm、重さ 66.56 g。5～8はいずれも真鍮製で同一規格と思われ、日本海軍の九九式 20 mm 2号機銃弾の薬莖と推定される。

9は金属製の機械部品である。胴部は円筒形で下部に接続端子のようなものが2本認められる。長さ 6.1 cm、中央部の径 2.3 cm、重さ 52.61 g である。「投下電鍵」の文字が刻字されている。『目録』には「爆弾投下器」あるいは「投下器」の品名が複数みられ、こうした機器の部品であろうか。当掩体で攻撃を受け破壊された航空機のものかもしれない。10は用途不明の鉄製品で、爆弾穴から出土した。長さ 16.7 cm、最大径 5.2 cm、重さは 1030 g である。全体に錆つき形状が不明瞭だが本体部分に長さ 6.6 cm、径 1.6 cm 筒状の部品が付いている。筒部には、径 6 mm の穴が貫通する。素材の大部分は鉄と思われるが、筒部の先端は別の金属である。

11は板状の砥石である。一面が欠損し、他の五面に使用した痕跡が残る。残長 6.2 cm、幅 5.9 mm、厚さ 1.3 cm、重さは 53.82 g である。色調は黒色 (10YR 2/1) で石材は砂岩である。肌理が粗いことから荒砥に用いられたものであろう。製作時期は近代以降と推定される。12と13は煉瓦片である。いずれも掩体前面の煉瓦敷遺構からサンプルとして採集したものである。12は残長 10.0 cm (復元長 20 cm)、幅 9.8 cm、厚さ 5.8 cm、重さは 870 g である。焼成の関係で黒ずんだ部分もあるが、橙味を帯びた赤色 (10R5/8) を呈し、堅く焼き締る。胎土は緻密で白色粒子を少量含む。13は残長 12.3 cm、幅 10.2 cm、厚さ 5.9 cm、重さ 710 g。色調は暗灰色 (N3/) を呈し、胎土には炭化物が多く含まれる。非常に脆く、手で持つと崩れてしまう状況である。形状は煉瓦状をなすが、素材や製法は通常の煉瓦とは異なるものと考えられる。煉瓦敷からは多くの煉瓦が持ち去られてるが、この煉瓦状ブロックは利用価値が認められず現地に残されたのであろう。

## 【参考文献・参考資料】

- 伊澤保徳 1995『隼攻と銀河』  
佐用泰司 1996『海軍設置隊の太平洋戦争』  
湯沢豊編 2000『海軍陸上爆撃機 銀河』世界の傑作機スペシャルエディション Vol.1  
原剛監修 2004「航空機用掩体」『歴史群像』No. 68  
行橋市教育委員会 2007『稲敷豊後塚遺跡1』行橋市文化財調査報告書 第34集  
行橋市教育委員会 2019『渡瀬築遺跡B区』行橋市文化財調査報告書 第64集  
安田晃子 2019「築城海軍航空隊と宇佐海軍航空隊の概要」2019. 12. 7発表資料  
織田祐輔 2019「米軍資料に見る築城基地と空襲」2019. 12. 7発表資料

## 第IV章 稲童地区地下通信司令部壕の測量調査

稲童地区地下通信司令部壕（以下「壕」とする）は、稲童1号掩体の南約430mの行橋市稲童422-1および422-3に位置する。掩体が多数築かれた丘陵地帯の南端部にあたり、南東約50mを東流する音無川の対岸が築城飛行場である。

測量調査は平成11年6月10日から7月8日にかけて行った。

### 壕の構造

壕は東西に2つの出入口を持ち、丘陵の上面から階段を使って地下に降る構造である。東側出入口は当初の姿をよくとどめているとみられるが、西側は損壊しており、残存長36.7mである。現在は地下部分の直上に民家が建てられている。主軸はN-86°-Eを指し、東側出入口の延長上には音無川を渡る松原橋が架かる。以下に構造の詳細を東側から順に述べる。

東側出入口はコンクリート造の躯体が概ね原形を保って残存しているとみられる。現地表面からの高さは3.2mであるが、外面に残る型板痕跡からコンクリート床面が本来の地表面の高さで、それより下は土に埋まっていたものが後に宅地造成に伴い地盤が削平され、露出したものとみられる。躯体天井部の厚さは約40cmである。壁外面には水平、内面には通路と平行に傾斜して型板痕跡が残っている。内部通路は幅1.2mで、残存長1.3mの地上床面があり、27段の階段で5.3m下りる。傾斜は約34.9°で踏面は平均28.1cm、蹴上は平均19.6cmである。

階段を下りると1.2m四方のスペースの左右に開口があり、左側（南側）には幅3.0mで奥行2.0m、の2室が順に並ぶ。奥の行き止まりの壁には天井付近に穴があるが、奥行きは不明である。通風孔であろうか。

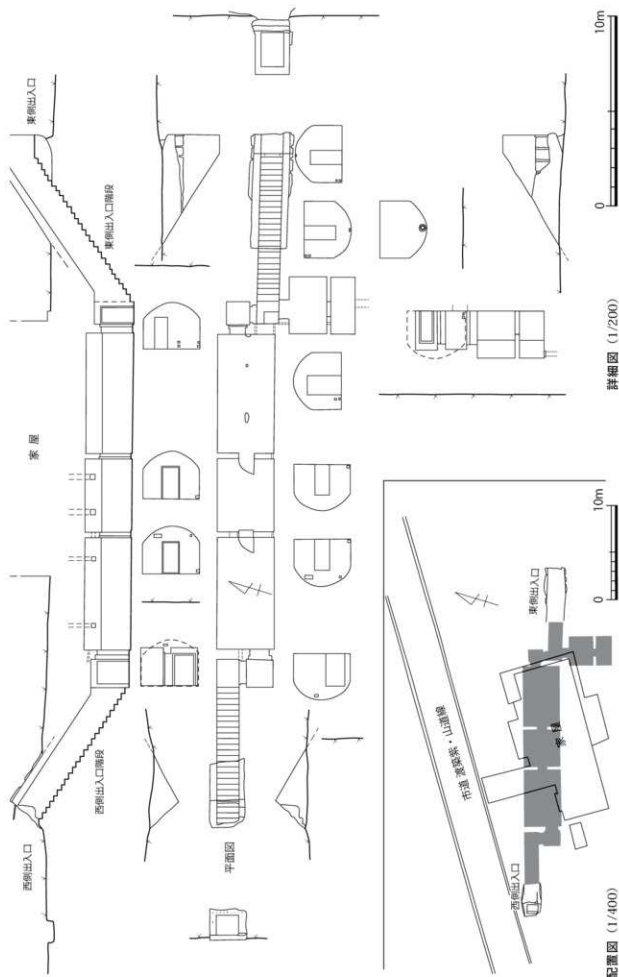
階段下から右側（北側）には再び1.2m四方の小部屋があり、西側に地下の主要な空間が続く。階段下およびこの小部屋の天井は水平である。階段を下りて90°右折して小部屋があり、さらに90°左折して地下の主要空間に入る構造は西側出入口でも同様である。銃弾や爆弾片等が内部に飛び込まない工夫であろう。

地下主要空間は幅約3.0m、全長16.7mで、厚さ約30cmの壁2枚に区切られて3室になっている。区切る壁には中央に幅約80cm、高さ1.6mの扉があるほか、排水やケーブル類を通したとみられる穴があいている。各部屋の長さは東から順に6.3m、3.9m、5.9mとなっており、中央がもっとも狭い。床面は西の部屋から東の部屋にかけて低くなっており、排水を考慮したものと思われる。部屋の短軸の断面形状は、高さ約1.5mの垂直の壁の上にかまぼこ形（ヴォールト）の天井がのった作りになっている。中央および西の部屋の天井には通風孔とみられる穴が上方にあいている。

西側出入口は階段の途中から崩壊し、本来の構造や高さは不明である。階段は24段が残存し、4.8m下りる。傾斜は約33.5とわずかに東側より緩やかで、踏面は平均30cm、蹴上は平均20cmである。

各部分の天井高は、東側に残っている地上部分が1.8m、階段部分が約1.6m、階段下の正方形スペースおよびその次の正方形の小部屋が約2.0m、地下の5室がおおむね2.5～2.6mである。





第13図 稲童地下通信司令部壕跡実測図

## 第V章 稲童掩体（稲童1号掩体壕）の保存整備

行橋市稲童地区にはアジア太平洋戦争末期に有蓋・無蓋、あるいは大型（中攻用掩体）・小型の掩体が多数建造されたが、戦後の宅地開発や開墾、工業団地の造成などで徐々に数を減らした。しかし掩体は忘れてはならないアジア太平洋戦争の記憶を後世に語り伝える貴重な文化財として、状態が良い大型有蓋掩体1基を選定し、地下通信司令部壕跡とともに平和教育の場として保存・活用を図ることとした。

平成11年度に稲童掩体（以下、1号掩体）と地下通信司令部壕跡（以下、司令部壕）の測量図および周辺の字図を作成した。

平成12年度に1号掩体本体の劣化調査を行ったところ、鉄筋の露出やコンクリートの浮き、漏水等が確認され、修復処置の必要が指摘された。平成13年度に1号掩体および司令部壕に説明板を設置した。平成14年度に1号掩体の土地所有者より借地を開始するとともに、整備基本設計を策定した。

平成15年度に1号掩体の発掘調査を行った。また同年整備実施設計を策定した。平成16年度に防衛庁の築城飛行場関連公共施設（教育文化施設：稲童1号掩体壕史跡公園）整備事業で福岡県道25号門司行橋線と市道長迫線との交差点の角地に駐車場用地383㎡、市道長迫線と1号掩体との間に広場用地635㎡を購入した。駐車場を広場入口から約100m離れた県道沿いに設けたのは、当時市道長迫線の拡幅が計画されていなかったからである。

平成19年度に防衛省の特定防衛施設周辺整備事業として駐車場整備を行い、アスファルト舗装し、説明板および案内サインを設置した。なおこの駐車場には平成23年度に観光支援自動販売機を設置した。

平成20年度に福岡県の地域活性化事業で1号掩体の鉄筋コンクリート劣化部分の維持補修工事を行った。打診にて劣化範囲を確認し、コンクリート中性化抑制剤塗布、露筋部処理、ひび割れ修理、強化処理のうえ古色仕上げした。掩体内部については戦後に掘られた穴等は埋め戻し、旧状を推定し復元した。

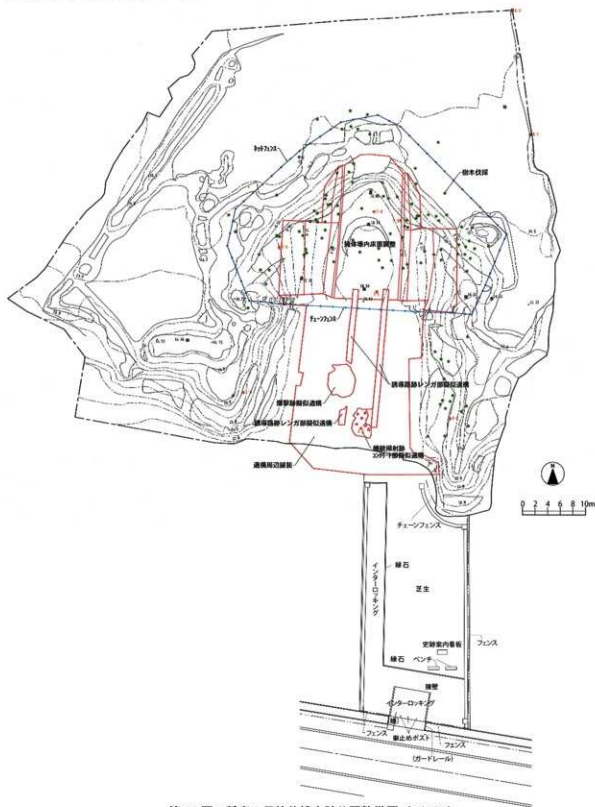
平成21年度に発掘調査で掩体内から前面にかけて確認された遺構の復元整備を行った。発掘調査で検出された煉瓦敷や爆弾穴などの遺構は埋め戻し、地下に保存することとした。遺構の上に厚さ10mmの保護砂を敷き、その上に厚さ130mmの強化真砂土層を敷設して煉瓦敷などをレプリカ等によって地表表示することとした。

平成22年度には、7月の豪雨の影響で掩体壕内部に土砂崩落があったため、盛り土を行い排水管等を埋設した。また特定防衛施設周辺整備事業で広場を整備し、芝生敷きとして、できるだけ掩体の景観を妨げないように、掩体から離れた位置に説明板とベンチを設置した。

平成25年度から翌年にかけて築城飛行場関連公共施設（教育文化施設：稲童1号掩体壕史跡公園）整備事業で計9筆4,467㎡を購入し、1号掩体の敷地の公有化が完了した。

稲童1号掩体壕史跡公園にはその後、平成29年度に被弾煉瓦塼、平成30年度に旧仲津小学校奉安殿を移設保存している。被弾煉瓦塼は1号掩体の北西約400mの集落内の民家の塼で市道の拡幅ともなって除却されることとなったが、両面にわたって激しい機銃掃射にさらされた痕跡を残す戦争遺跡として知られていたことから、一部を切り取る形で移設保存したものである。旧仲津小学校奉安殿は現在の仲津小学校（行橋市大字道場寺1439）の校門付近に昭和2年（1927）に設置され、忠君愛国思想の醸成と戦事

体制を支える役割を果たした。終戦を機に観山中腹に移設され、戦没者を祀る英霊廟として祭祀されてきたが管理が困難になったため、行橋市が寄贈を受け、稲童1号掩体壕史跡公園に移設保存したものである。1号掩体、司令部壕とともに、戦前・戦中の歴史や社会を知るための資料として、歴史学習や平和教育に活用されることを期待している。



第14図 稲童1号掩体壕史跡公園整備図 (1/600)

## 第VI章 結 語

昭和14年(1939)海軍によって築城飛行場の建設が始まり、現在の行橋市、築上郡築上町、京都郡みやこ町には飛行場を中心として関連施設が次々とつくられていった。80年ほどの時が流れ、それらは次第に姿を消していったが、今なお残る当時の遺構も少なくない。その一つが航空機用掩体で、なかでもコンクリート製の中攻用有蓋掩体は規模が大きく、最もシンボリックな遺構である。

築城航空基地が本格的に稼働するのはアジア太平洋戦争において戦局が劣勢に転じた昭和18年(1943)のことである。翌昭和19年7月にはサイパン島が陥落、同年8月にはグアム島やテニアン島も米軍に占領され、これらの島々から飛び立った米軍の爆撃機から日本本土は空襲を受けることとなる。築城航空基地に掩体が建造され始めたのはこの頃だとされる。総数50余を数えた築城航空基地の掩体群も、現在は有蓋掩体3基といくつかの無蓋掩体を残すのみである。

残された3基の中攻用有蓋掩体のなかで、この掩体を選び保存整備することとなった。人目を忍ぶように丘陵の山影に佇む巨大な掩体を初めて見たときは、その異様な存在感に息をのんだものである。当時1号掩体周辺はまだ開発の手が及ばず、昔ながらの景観が維持されていた。そのため掩体本体だけではなく土堤状に加工された地形のほか、煉瓦敷道構や爆弾の穴や機銃掃射の跡も保存されていた。周辺の環境や関連遺構が共に良く保存されていることが当掩体の特徴であり、重要性であるといえよう。

当掩体の設計図等は見つかっていないが、地形を巧みに利用しながら複数の工法を駆使して堅牢かつ効率的につくられていることがわかる。掩体前面から検出された2条の帯状の煉瓦敷は、その間隔が陸上爆撃機「銀河」の主車輪と一致することから、その格納を意図して敷設したものと推定される。銀河は海軍の期待を集めた双発爆撃機で、昭和18年8月から生産が始まり昭和19年10月に制式採用された。築城航空基地にも配備され、昭和20年3月18日には松永輝郎大尉率いる6機(1機は途中で基地に帰還)が九州沖の米機動部隊に向けて特攻出撃している。

築城航空基地は、昭和20年3月18日から8月8日まで7回にわたり米軍機の空襲を受けた。空襲による被害は飛行場のある基地中心部だけではなく周辺地域にも及んだ。とくに飛行場の北側の稲童地区は掩体群があったことから、攻撃目標となり集落も大きな被害を受け、住民に犠牲者もでた。この地区の民家や墓地や神社などには、機銃掃射や爆弾の被弾遺構が残る。これらの戦災遺構の一つで道路の拡張で撤去されることになった機銃痕のある煉瓦塀を平成29年(2017)に掩体のある史跡公園に移設保存した。

本報告を纏めるにあたり苦労したのが、築城航空基地に関する史料が少ないことだった。終戦時、軍が文書や記録類の処分を命じ、これらの隠滅を図ったためだと思われる。わずかに80年ほど前のできごとであるのに、明確にできないことが多いのは、文書類が失われた面が大きいの。戦争遺跡は、こうした文書資料の欠落で生じた歴史の空白を埋める重要な役割をこれからも担っていくことだろう。

本書は発掘調査や測量調査で知り得た稲童掩体や周辺の戦争遺跡の一端を報告するものであるが、今後は掩体や築城航空基地について土木工学や軍事史など多方面から、さらに緻密な調査研究が行われることを期待している。

行橋市の史跡として保存整備してきた「稲童1号掩体壕」が令和5年3月、築造当時の状況を良く残し、軍の動向や戦況の推移をも体現する遺跡として、県内の戦争遺跡のなかで初めて県の史跡に指定された。「海軍築城航空基地稲童掩体」と名を変えたこの史跡が、日本の歩んだ近代の歴史と、平和の尊さを考える場としてこれからも活用されていくことを願い欄筆する。

# 圖 版

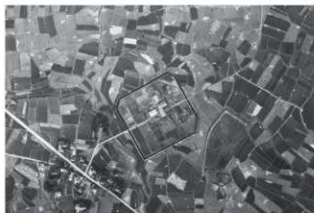


(1947年12月15日米軍撮影)

終戦後の築城飛行場とその周辺



1. 掩体群および誘導路



2. 羽根木地区送信所



3. 道場寺地区水源地



4. 岸川補助飛行場



5. 着艦練習場

(2は1947年12月7日、ほかは1947年12月15日米軍撮影に加筆)



1. 羽根木地区送信所跡



2. 誘導路跡



3. 石割施設跡



4. 小型有蓋掩体(消滅)



5. 大型無蓋掩体



6. 被弾痕の残る煉瓦塼(移設前)



7. 被弾痕の残る安浦神社石造物







1. 調査開始前の稲童掩体  
(除草作業中)



2. 調査前の掩体内(後部を望む)  
後部開口部より土砂が流入していた



3. 調査前の掩体内部(東側)



1. 後部の開口部から流入した土砂の除去



2. 掩体内部の調査状況



3. 掩体内部の遺構検出状況（東側）



4. 掩体内部の遺構検出状況（西側）



5. 薔葵の出土状況（掩体内部）



1. 発掘調査状況



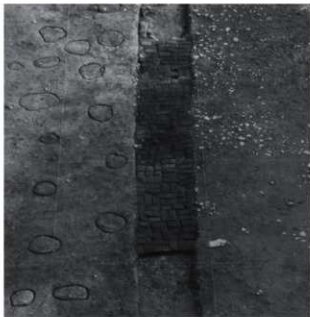
2. 煉瓦敷の検出作業



3. 掩体前面の遺構検出状況(南から)



4. 掩体前面の遺構検出状況(北から)  
2条の煉瓦敷、爆弾穴、機銃の被弾痕が見える



5. 煉瓦敷の検出状況(北から)



1. 爆弾穴（南から）



2. 爆弾穴の埋土（東から）



3. 爆弾穴の遺物出土状況（薬莖）



4. 爆弾穴の遺物出土状況（不明鉄製品）



1. コンクリート敷に残る機銃掃射の被弾痕（西から）



2. 地表に残る機銃掃射の痕跡（北から）



3. 機銃弾の出土状況



4. 発掘調査完了状況



1. 現在の稲種掩体 (2022年撮影)



2. 掩体前面から後部を望む



3. 掩体後部

アーチとドームが組み合わされ、アーチ部の半分からドーム部にかけてZ5工法で作られていることがわかる



4. 掩体前部奥壁に見える工法の違い  
上部がZ6工法、下部がZ5工法



5. 掩体前部側壁に見える工法の違い  
上部がZ6工法、下部がZ5工法



1. 前部奥壁と天井の接続部  
型枠の板材が部分的に残存する



2. 前壁の内側



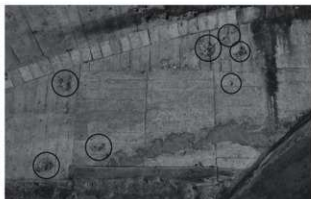
3. 前壁の鉄筋



4. 前部天井の鉄筋



5. 掩体内部側壁に残る被弾痕跡  
機銃掃射や爆弾の炸裂の痕跡と考えられる



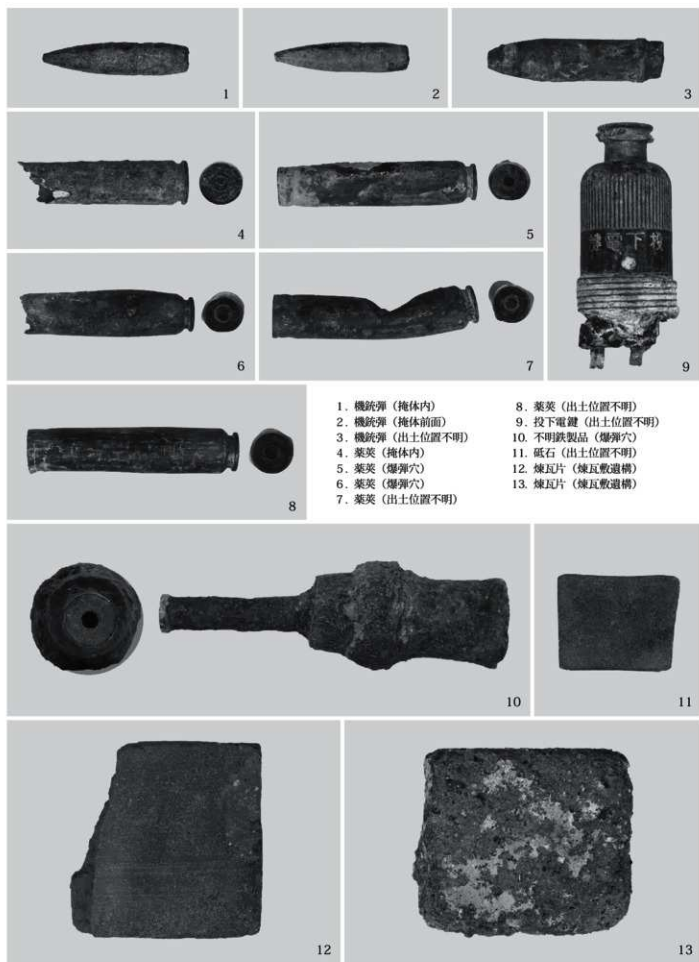
6. 前部奥壁に残る被弾痕跡(○印)  
機銃による射撃が困難な高い位置の痕跡は爆弾の炸裂による傷跡  
と考えられる



7. 掩体前壁に残る被弾痕跡



8. 掩体前壁の型枠跡と被弾痕跡







1. 地下通信司令部壕跡(東側出入口)



2. 地下通信司令部壕跡(階段)



3. 地下通信司令部壕跡(内部)



4. 地下通信司令部壕跡(内部)



5. 掩体の平成 22 年豪雨被害状況(内部右側)



6. 史跡公園駐車場



7. 被弾痕の残る煉瓦塼(移設後)



8. 旧仲津小学校奉安殿(移設後)

## 報告書抄録

ふりがな	かいくんつきこうくうきちいなどうえんたい（いなどう1ごうえんたいごう）							
書名	海軍築城航空基地稲童掩体（稲童1号掩体壕）							
副書名	海軍築城航空基地関係戦争遺跡調査報告1							
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 69 集							
編著者名	小川秀樹 天野正太郎							
編集機関	行橋市教育委員会							
所在地	〒824-8601 福岡県行橋市中央一丁目1番1号 TEL0930-25-1111							
発行年月日	2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
海軍築城航空 基地稲童掩体	福岡県行橋市大字 稲童 1095-17 外	402133	14049034	33° 41' 38"	131° 1' 49"	20030521 ～ 20030813	900 m <sup>2</sup>	範囲内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
海軍築城航空 基地稲童掩体	戦争遺跡	近代	有蓋掩体 煉瓦敷遺構 爆弾穴跡 機銃掃射跡	機銃弾 葉莢 投下電鍵 礮石 煉瓦片	昭和18年につくられた海軍築城航空基地の中攻用有蓋掩体。福岡県指定史跡。			
要約	<p>昭和18年につくられた海軍築城航空基地の中攻用有蓋掩体の一つ。鉄筋コンクリート製で、丘陵を掘り下げ、土饅頭工法（Z5工法）と型枠工法（Z6工法）の両方を用いて建造する。</p> <p>掩体は戦後に若干手が増えられているが、周辺の地形も含めて保存状況は良好で、内部にはテラス状の段が残り、掩体前面の左右には土堤状に成形された地形も認められる。発掘調査では掩体前面より2条の帯状の煉瓦敷や爆弾穴、機銃掃射痕が検出された。出土遺物には日本軍や米軍の機銃弾や葉莢のほか機械類の部品などがある。</p> <p>本掩体は築造当時の姿を良く残すとともに、空襲の状況がうかがえる遺構が残る点が貴重である。平成14年に「稲童1号掩体壕」として行橋市の史跡に指定され、その後発掘調査や公有化を行い、史跡公園として整備した。令和5年3月28日に福岡県内の戦争遺跡として初めて県の史跡に指定され、「海軍築城航空基地稲童掩体」と改称された。</p>							

---

## 海軍築城航空基地 稲童掩体

行橋市文化財調査報告書 第69集

令和5年(2023)3月31日

発行 行橋市教育委員会  
福岡県行橋市中央1丁目1番1号

印刷 築上印刷株式会社  
福岡県豊前市岸井201-1

---

